

一般演題A-1

周産期から小児科まで継続的に関わる MSW の役割

井上美智子¹⁾、濱野由起²⁾、岡邑和子³⁾、三宅祝子⁴⁾、前田真治⁵⁾、毎原敏郎⁵⁾

兵庫県立塚口病院

MSW・PSW¹⁾、小児科外来看護師²⁾、産婦人科外来看護師³⁾、地域連携部課長⁴⁾、小児科医師⁵⁾

MSW の業務内容は、病院の規模や機能によって求められる役割が異なっているが、当院では MSW が周産期から小児科まで専任で関わっている。地域の特性もあって、虐待への対応件数は相当数に上っていて、平成 24 年上半期の半年で支援した家庭は 250 件以上となり、そのうち児童相談所が関わるケースは 23 件あった。

虐待の予防とその対応のコアメンバーとして MSW が果たす役割と業務実態を報告し、課題を考察したい。具体例として小児科、産婦人科を数年間継続的に関わってきた事例を紹介する。

一般演題A-2

児童養護施設で生活している慢性疾患を持つ被虐待児への看護師によるセルフケア
援助

橋倉尚美

愛仁会高槻病院 小児病棟看護師

児童養護施設には多くの被虐待児が入所しており、厚生労働省の調査では、入所児童の障害や罹患傾向はそれぞれ 2 割とされ、医療的ケアの必要性が高まっている。慢性疾患をもつ被虐待児を対象とし看護介入した結果、看護師との関係を構築していく構造が示唆された。また、生活場面の共有や看護師自身の自己開示、身体的ケアを行うことが安全や安心という感覚を強化し、医療的知識や技術を自分の事として捉えていくことが出来た。

一般演題A-3

警察・児童相談所とともに受診した家族の事例についての一考察

中村富美江¹⁾、浅山倫子²⁾、藤原摩耶³⁾、横内裕佳子³⁾

日本私立学校振興・共済事業団 東京臨海病院
小児科外来看護師¹⁾、MSW²⁾、小児科医師³⁾

3歳男児。たばこによる熱傷を疑われ、保育園より警察と児童相談所に通報あり。受傷機転の評価目的で当院形成外科を紹介され夜間救急外来を受診した。初療医が虐待診察に不慣れなことに加え、事件性の判断に躊躇する警察と児の保護を急ぎたい児童相談所との意見の相違があった。事前情報が不足していたことと、警察・児童相談所との意見交換が不十分であったため、医療者側が混乱をきたし、児の安全を守れない対応につながる恐れがあった。小児科医が介入したことで児と家族を詳細に観察するとともに、翌日の再診予約につなげることであった。この日は診察後警察の監視下で一時帰宅させ、最終的に児および兄が児童相談所に一時保護された。虐待が疑われる事例において、子育て支援の姿勢を示しながら小児科医・専任看護師が介入することの重要性と事前にケースの把握に努め、どのように関わるのか意見交換を行い対応することの必要性を改めて認識した。

一般演題A-4

要保護児童対応クリニカルパスの運用～連携の円滑化を目指して～

柿沢有希子¹⁾、松井弘美¹⁾、五十嵐 登²⁾

富山県立中央病院 小児病棟¹⁾、小児科²⁾

自施設の要保護児童(気がかり児童・母子・妊婦を含む)対応件数は、平成 23 年度には 114 件であり、そのうち小児病棟から児童相談所への通告は 3 件であった。通告された事例では、虐待を疑う判断基準や、他部門との連携・調整がスタッフ間で統一されておらず個々の対応に委ねられているという問題があった。そこで、誰が対応しても一定のケアの保証ができることを目的として要保護児童対応クリニカルパスを作成した。事例を通してどのような対応流れ・運用を行っているのか提示し、医療機関としての役割と地域連携についての今後の課題について述べる。

一般演題A-5

育児期母親における母性意識の高低と局所脳活動の関係

佐々木綾子¹⁾、小坂浩隆²⁾、波崎由美子³⁾、松木健一⁴⁾、岡沢秀彦⁵⁾

大阪医科大学看護学部看護学科¹⁾、福井大学医学部子どもの発達研究センター²⁾、福井大学医学部看護学科³⁾、福井大学大学院教育学研究科⁴⁾、福井大学高エネルギー医学研究センター⁵⁾

虐待の要因のひとつに乳児の「泣き」があげられる。そこで本研究では、育児期母親の母性意識の高低と、乳児の泣き課題提示時の局所脳活動 (fMRI) の関係を明らかにすることを目的とした。その結果、母性肯定得点が低い母親ほど、左島/左楔前部の賦活が強く、泣いている乳児の声に対して嫌悪を感じている可能性が推察された。楔前部は視覚野の一部で、親和性にも関与している部位であり、肯定得点が低い母親群は泣いている乳児の映像をいつものことと感じたため、肯定得点が低くなったと考えられた。これらの結果から、母性意識肯定得点が低い母親群は、「いつもと違う泣き方だ」「泣いているのはどうしてだろう」という感覚が抱きにくい、つまり乳児の泣きの火急性を察知しにくい可能性が明らかとなった。これらの結果から、母性意識が低い場合は、母性準備期から乳児の泣きに対する応答性を高めることが、虐待防止策につながると考えられた。